日本災害看護学会先遣隊　令和元年台風第19号活動報告（長野県）

令和元年10月26日

活動・報告者：宮越幸代

1. 活動の概要

活動日時：令和元年10月18日（金）8:30～22:00

活動場所：長野〇〇〇〇体育館避難所

支援目的：先遣隊活動

災害被害の概況：台風19号の全国的な被害は、18日午後6時時点で死者80名、行方不明者11名、住宅の全・半壊は約550棟、床上・床下浸水は4万棟以上、避難者は4000名以上と報道されている。長野市内の小中学校の休校は変わらず続いている。長野市では16日以来、新たな死者、行方不明者の報告はない。

活動日の状況：千曲川の堤防決壊、長野県及び長野市災害対策本部開設の6日目

2. 活動の実際

時間	活動の内容
8:30～	長野保健所での長野地域災害保健医療調整会議に出席。認定特定非営利活動法人「災害人道医療支援会」(以下、HuMA)チームの活動を確認、運動公園避難所と松代地区の戸別訪問（他県派遣保健師らに同行）に分かれて活動する用務を開始。報告者は避難所アセスメントを担当し、長野市保健師と各避難所の有病者等の情報を確認する。
10:30～	長野〇〇〇〇体育館雛所を訪問。体育館内の温度は24度で、湿度は21%（昨日はLOW値)、昨日の気温とさほど変わらないが湿度が多少上がったものの乾燥傾向は変わらない。昨日、咳嗽と鼻汁があり内科受診を促した方の確認をしたところ、すでに受診済みで内服と経過観察を指示されていた。夜間の再訪問で再度確認することになった。寒冷期に入り、インフルエンザの流行が懸念される中、市では高齢者の希望者に無料で避難所でのワクチン接種の希望を取り始めすぐにも開始されることになった。また、今後の有熱者や感染が疑われる方の収容室の必要性から、使われていない医務室を整理し、隔離室として3床の段ボールベッドを準備した。避難所の管理者には隔離基準が不明とのことで、今後も継続的に支援をしていくことが話し合われた。さらに日常的にできる衛生習慣として手洗いと真水や残った緑茶でのうがいを促す啓発ポスターも作成し、カラーコピーで増刷し、ほかの避難所にも配布・掲示することになった。また、トイレの排泄後の手洗い後のふき取りについて、ペーパータオルがいまだに設置されていないことについて、前日会議で提案されたがすぐには着手されていないことが確認され、対応を急ぐようお願いすることになった。単身の高齢男性が疥癬を持っている情報があったため、昨夜から対応を協議していたが、災害福祉ネット及び県の福祉チームが責任をもって対応していることも確認した。 乳幼児の避難者を直接確認できていないが、子どものサイズに合ったおむつがない、子ども用の体重計がないなどの問題も聞かれたため、日本助産師協会も会議メンバーに入っていることから、ニーズのもととなっている対象者の存在と対応先を確認

	することになった。また、この2日間で女性の下着や衣類が届き始めたが、下着類を持ち出すのは人目が気になるという観点から、女性の下着や衣類を女子更衣室に移動した結果、大変好評であった。できれば、それらを持ち帰る袋があるとありがたいとの訴えがあり、配給品のレジ袋が大量にあったため、設置した。 　また、ペットの犬と猫を同伴され体育館とは別室に避難されているご家族に継続的にかかわってきたが、ペットであった猫が急死した情報を前日に聞き、訪問したがご家族全員が不在であった。
12:00～ 16:30	公務のため、いったん先遣隊用務を離れる
16:30～	長野地域災害保健医療調整会議に参加。巡回したアセスメント結果を報告、問題点について協議。
19:30～	運動公園避難所を訪問し、片付けから戻った方々の体調の確認、環境測定、希望する方やひざの痛み、腰痛がある方々に段ボールベッドを提供した。また、夜間は水銀灯を消してもらえないため眠れない、などの訴えを聞き取った。そこで体育館事務室の担当者と相談して夜間の水銀灯の点灯数の調整を行った。風邪にり患していた男性の体温が37.7度と確認されたため、管理者に報告し、隔離室に入っていただくことを提案し、本人からも了解を得た。明日以降は、避難所のごみ箱場所の移動、談話・食事スペースの設置などを検討する見込みとなった。また今後の避難所統合に向けた区画の整理なども検討していく予定である。 　ペットをなくされたご家族を再度訪問し、奥様と娘さんに会えた。ヘリコプターで一緒に吊り上げられて避難したのに、ここにきてストレスだったのだろうかと悲嘆にくれるご家族の気持ちを聞きとり、もともと病気を患って長くない見込みだったこと、みんなが寝静まっている中でひっそりと苦しまずに逝けたのではないか、18年間ともに家族としていてくれた猫に感謝する気持ちを自ら話されるまで傾聴した。
22:00	活動終了

3. 課題

　寒暖の差が激しくなり、長野でも地域によっては朝一けた台の気温も記録されるようになった。避難者においては、連日の片付け作業による疲弊、偏った栄養、トイレ環境の悪さ、寒さ、不眠、自分だけ快適に過ごすことへの気兼ねなどによる心身への悪影響が考えられる。新聞紙上ではようやく市が市営住宅やホテルの確保の見通しが立ったこと、11月初旬から要配慮者を中心に移行を進める旨の報道がされたが、ホテルについては不確定であるうわさや市営住宅数の限界など、必ずしも希望が持てるものではない。長野〇〇〇〇体育館避難所の意向調査ではほとんどの方が「元の自宅に戻りたい」と回答しているという。避難生活が長期化し、寒さが迫る中、現実的な対応を待つばかりである。様々な憶測や誤解が混乱を招かないよう誰もが避難所集約についての言動や行動を慎重になさっているのは、信州人ゆえのまじめさか。いずれ近いうち、の避難所集約や移転を想定した保守的な発言や動きもときどき認められるが、看護職として、今まさに必要な観察と関わりを逃さず、人々の健康を守ることを最優先したい。そのためには、専門職による継続的な査察と介入

が欠かせない。

　また、施設が水没し、広域搬送された県立総合リハビリテーションセンターや賛育会の高齢者施設の患者、高齢者の情報が得られないが、皆様のその後を思うとどのようにされているのか大変気になる。治療中断は避けられたとしても、浸水が迫る中での長時間の待機や早朝からの搬送時の負担、家族との隔絶による影響が少なからず予想される。定期通院していた病院や診療所、歯科医院が診療不能となったその後の通院者の対応も把握しきれていない。今回の災害は、広域にわたり、次なる台風や豪雨も各地であるため、対策本部もいまだに気が抜けない状態にある。医療対応においては体制を縮小せず、やはり外部支援の力をうまく活用して、この難局を乗り切る受援力が必要ではないだろうか。